

(二〇二〇年度)

7 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は24ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能を使用してはならない。また、スマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいいねいに消すこと。消しすぎはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

次のA、Bの文章を読んで、後の問に答えよ。

A

アリストテレスにとって「認識」とは、事物の存在論上の本質もしくは実体とは何かという問題を意味していた。したがって運動の解明は、「どのように」運動が行なわれるかではなく、あれやこれやの運動が「何故に」その特有の形態をとるのかを、事物の本質から、目的因(窮極因)にのっとって説明することであった。それゆえ認識論は、所謂「実体・形相」の形而上学と不可分のものであった。論理学もまたこの形而上学を支えられていた。ガリレイが生涯の後半期に議論の対抗軸におき打倒の対象にしたものは、もちろんこのアリストテレス存在論・形而上学であったが、それにはたいして彼は、別個の存在論を対置したわけではない。むしろ彼の科学は、存在論上の問題、つまりあるものがその本質(ヌーメノン)ないしは実体においてなんであるかという問題を断念し、学の対象を現象(フェヌメノン)に限定することによって可能となっていたのだ。運動についていうならば、「何故に」と問うのではなく、もっぱら「どのように」と問うものである。その意味でガリレイにとっての認識とは、いうならば「現象論的認識」であった。

B

一見したところヌーメノン(本質)への問いかけを断念し、もっぱらフェヌメノン(現象)の考察に甘んずるというガリレイの態度は、きわめて受動的で消極的な態度であるかのように思われる。しかしこの学問観の転換によってはじめて、じつは自然と向きあう人間の姿勢も一変したのである。

ガリレイは、現実の自然が豊富で複雑な世界であることを百も承知していた。彼がやろうとしたことは、そのような複雑きわまる自然にたいして、人間が自ら構成した数学的・幾何学的諸概念と諸定理を用いて自然のなかに法則性を主体的に読み込もうとすることであった。その意味において、ガリレイによってはじめて、自然にたいして人間の認識が能動的に立ち向かう

という「近代人の姿勢」が生み出されたのである。

古代哲学と近代哲学の相違は、カントが『純粹理性批判』の第二版序文（一七八七年）で語った所謂「コペルニクスの轉換」に特徴づけられる。「我々はこれまで、我々の認識はすべて対象に従って規定されねばならぬと考えていた。……そこで今度は、対象が我々の認識に従って規定せられねばならないというふうに想定したら、形而上学のいろいろの課題がもつとまぐ解決されはしないかどうかを、ひとつ試してみたらどうだろう。……」ガリレイが行なったのは、この態度變換に他ならなかったのであった。

カントの『純粹理性批判』第二版が出た翌年に『解析力学』を著したラグランジュは、そこでガリレイについて²「木星の衛星、金星の満ち欠け、太陽黒点などの発見は、望遠鏡と勤勉とを必要としたにすぎなかった。しかし、つねに眼の前にありながらいつの時代にも哲学者の探究を免れてきた現象のなかに自然の法則を洞察するためには、並はずれた天才が必要であった」と語っている。じつさい機械論者ガリレイにとつてその本領は、地上物体の運動の科学において発揮されたのであり、その成果はガリレイが七十才を越えてしかも宗教裁判の判決により社会から隔離されたなかで書き上げた、彼のもつとも価値多い著作『新科学対話』（一六三八）に結実した。ガリレイ自身、『新科学対話』の第三日冒頭に「私の目的はきわめて古い対象についてのまったく新しい科学をうち建てることである。自然界においては、運動より古い、根源的なものはない。」と自己の成果を認めているのだ。

たしかにガリレイの運動理論は時代を画している。しかしそのことは、単に、等加速度運動では速さが時間に比例し落下距離が時間の二乗に比例するとか、放物体の軌道は放物線であるというような個別的成果だけを指しているのではない。落体理論などのいくつかの成果は、すでに十四世紀のオレームやマートン学派たちによつても得られているし、また投射物体は45°の仰角で打ち出されたとき最長射程をもつこともタルターリヤによつて見出されていたといわれる。真の³

「X」

は、それ

たとえば、一石の落下と木の葉の落下を較べてみればおよそ異なつた外觀を呈する現実の自然物の落下にたいして、様々な副

次的要因を分別し捨象し、一連の「思考実験」を適用することで、すべての物体が第一義的には等加速度の落下をすると推察する。そこで、完全な自由落下や完全に滑らかな斜面上の落下においては等加速度運動が生じるといふ仮説を立て、等加速度運動における時間と落下距離の関係を純粋に数学的に導き出し、そのあとで、完全な球とか完全に滑らかな斜面という理想化された事物や空気抵抗の不在という理想化された条件にできるだけ近く事実上それらと同一視しうる実験装置と実験条件を人為的に作り出して実験する。そしてその結果と数学的に見出された関係とを照合させることで、はじめに仮設した法則の正否を判定し、数学的に得られた法則の適用限界を評価する。これがガリレイの方法である。このプロセスをバートは、分解 (resolution)・論証 (demonstration)・実験 (experiment)と三段階に定式化しているけれども、とくにここでは実験が最後に置かれていることに注目すべきであろう。そしてガリレイの実験の多くは「思考実験」である。

古代のピタゴラス派やあるいはコペルニクスが、地面は確固として不動であるという日常的・実感的経験にそむいてまで地動説を唱えたことを、「彼らはいきいきとした知性でもって自己の感覚に暴力を加え、感覚的経験が明らかに反対のことを示しているにもかかわらず理性の命ずることを優先させることができたのです」と賞讃したのはガリレイ本人であった。事実、『天文対話』では、認識における感覚と経験の重要性にくり返し言及しているのは、むしろスコラ派のシンプリチオであるし、さらには、「経験はあらゆる科学に必要不可欠である。なぜならあらゆる科学の原理は帰納の結果である」と語ったのは、当時アリストテレス学最大の権威でかつガリレイの終生の論敵クレモニーニであったとのことだ。⁷ したがってガリレイにおける実験の位置づけは、ペーコンのいうような「一切の先入観を捨てて」受動的に経験的事実を蒐集し、しかるのちに帰納的に法則を導き出すためのものでは決していない。

現実にガリレイは、等加速度運動における落下距離と所要時間の関係を理論的・数学的に導き出したのちに、その帰結を検証するために、落下距離を拡大する目的で大きな斜面を用い、摩擦を減らすようになめし皮を貼り付け、また、必要な精度で時間を測定するために水時計を考案して、首尾よく実験を行なったといわれている。もちろんそのような実験装置は、現代のエレクトロニクスを駆使したものに較べてまったく単純で素朴な代物である。しかし、まずはじめに人間が頭のなかで法則を

構成し、しかるのちにその法則の眞理性を検証するために、基本要因を剔抉し^{てつげ}所望の効果を拡大し、逆に副次的攪乱要因を抑制する装置を作つて実験するという思想においては、現代の実験思想はガリレイの思想を一步も越えてはいない。

したがつてまた、ガリレイにおいては、数学的に構成された法則の基幹的部分が一回実験的に検証されたならば、その法則から演繹されるすべての命題は正しいことになる。彼は放物体は45の仰角で打ち出されたときに最長射程を持つことを数学的に証明しているが、その結果は水平方向の等速度運動と鉛直方向の等加速度運動が立証されていさえすれば、あらためて実験するまでもなく正しいのであつた。ガリレイのところでは「その理由を発見することによつて得られた一個の事実についての知識は、実験をくり返すことなしに他の諸事實を理解させ確かめさせるものです。……著者〔ガリレイ〕はかようにしておそらく経験上からはかつて観察されなかつたことまでも証明したのです」ということになる。

上述のガリレイの科学の方法のなかにこそ、自然認識の轉換——古代・中世と近代とを分つ「コペルニクスの轉換」——が存在する。

(山本義隆『重力と力学的世界』より)

- 〈注〉○アリストテレス：古代ギリシアの哲学者(前三八四—前三二二) ○ガリレオ・ガリレイ：イタリアの物理学者(一五六四—一六四二)、ガリレオとも呼ばれる ○イマヌエル・カント：プロイセン王国の哲学者(一七二四—一八〇四)
○ジョゼフ・ラグランジュ：フランスの数学者(一七三六—一八一三) ○E・A・バート：アメリカの哲学者(一八九二—一九八九) ○ニコラウス・コペルニクス：ポーランド出身の天文学者(一四七三—一五四三) ○フランシス・ベーコン：イギリスの哲学者(一五六一—一六二六)

問一 著者はなぜ傍線部1のように言うのか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a ガリレイが生涯の後半期に議論の対抗軸におき打倒の対象にしたものが、存在論上の本質を問うアリストテレス哲学であったから。

b ガリレイの科学は、事物の存在論上の本質に関わる問題を回避し、その対象を現象の考察に限定することによって可能となっているから。

c ガリレイにとつての認識論は、「実体・形相」の形而上学と不可分であり、現象を目的因(窮極因)にのっとり説明することであったから。

d ガリレイの現象に対する考察は、アリストテレスとは別個の存在論を対置したわけではなく、受動的で消極的な態度をもつてなされているから。

問二 傍線部2でラグランジュがガリレイについて述べていることを言いかえるとどうなるか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 木星の衛星などの新しい発見を行うことも必要であるが、古くからある哲学的現象を対象に従って規定しようとするところにこそ、並外れた天才の本領が現れる。

b 機械論者ガリレイにとつてその本領は、地上物体の運動のみならず木星の衛星、金星の満ち欠け、太陽黒点などの発見を可能にする望遠鏡という機械を作り出したところにある。

c 新奇な事実・現象の観察は勤勉と道具があれば可能だが、身近にありながら探究を免れてきた現象の背後に潜む自然法則を洞察するためには卓越した知的能力が必要である。

d つねに眼の前にありながらいつの時代にも哲学者の探究を免れてきた現象をすべて対象に従って規定するためには、自然に対して能動的に立ち向かわなければならぬ。

問三 文中の空欄³「X」に入る語としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 没時代性
- b 同時代性
- c 反時代性
- d 画時代性

問四 傍線部4について、「(思考実験)」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 人間の思考の性質を調べるために、自然物だけをを用いて行う実験
- b 実験装置と実験条件を人為的に作り出して数学的にのみ行う実験
- c 理想的あるいは極限的な条件を想定して思考上だけで行う実験
- d 思考における感覚と経験の重要性に基づき帰納的にのみ行う実験

問五 傍線部5について、ガリレイの方法における「分解」とは何を指すのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a はじめに仮設した法則の正否を理想化された条件にできるだけ近く分別すること。
- b 現象に含まれる様々な副次的要因を分別し捨象し、仮説の構成を可能にすること。
- c 異なった外観を呈する現実の自然現象を実験によって分別し捨象していくこと。
- d 理想化された事物などを数学的に分別し捨象し、法則の正否を判定すること。

問六 傍線部6について、ガリレイの方法における「論証・実験」を具体的に述べるとどのようなようになるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 仮説から予測を数学的に導き出し、理想化された条件に事実上同一視しうる実験条件を作り出して実験し、その実験結果を数学的予測と照合することによって仮説の正否を判定すること。

b すべての物体が第一義的には等加速度の落下をすると推察し、完全な自由落下においては等加速度運動が生じるといふ仮説を立てて、それを数学的に実験して経験上の限界を評価すること。

c 完全な球とか完全に滑らかな斜面という理想化された事物や理想化された条件にできるだけ近くなる実験装置を作り出し、実験による様々な副次的要因を分別し捨象していくこと。

d 認識における感覚と経験の重要性に注目し、等加速度運動における時間と落下距離の関係を経験的な実験によって導き出すことを通して、数学的に得られた法則の適用限界を評価すること。

問七 著者はなぜ傍線部7のように言うのか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 「一切の先入観を捨てて」実験によって経験的事実を蒐集し、そのあとで帰納的に法則を導くという態度は、アリストテレス学派の立場であって、ガリレイが言う認識における自己の感覚の重要性と両立しないから。

b ガリレイの方法における実験とは、数学的に見出された関係を感覚と経験によって帰納した結果と照合することを目的としていて、「一切の先入観を捨てて」実験を行うという考え方は決して相容れないから。

c 受動的に経験的事実を蒐集し、しかるのちに帰納的に法則を導き出すという考え方は、ガリレイの方法における完全な球とか完全に滑らかな斜面という理想化された事物や条件から数学的に導き出されないから。

d ガリレイの方法における実験とは、はじめに人間が能動的に理性を用いて仮説(法則)を数学的に構成し、その後、その法則の真理性を検証するために理想化された条件のもとで実験を行うというものであるから。

問八 傍線部8について、ガリレイはなぜこのように主張するのか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 水平方向の等速度運動と鉛直方向の等加速度運動が立証されていれば、副次的攪乱要因を抑制することによって、ガリレイの方法においては、すべての命題の真理性が証明されるから。

b ガリレイの方法においては、認識における感覚と経験の重要性が否定されており、したがって、法則の真理性を検証するために観察や実験はいっさい必要とされていないから。

c ガリレイの方法においては、等加速度運動では速さが時間に比例し落下距離が時間の二乗に比例するということさえわかれば、実験装置の工夫で法則の真理性を証明できるから。

d ガリレイの方法においては、数学的に構成された法則の基幹的部分が実験によって検証されさえすれば、その法則から演繹されるすべての命題の真理性が保証されるから。

問九 傍線部9について、ここで著者が言う「コペルニクスの転換」を簡潔に述べるとどうなるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 経験はあらゆる科学において必要不可欠であるとする態度変換

b 「一切の先入観を捨てて帰納的に法則を導きだそうとする態度変換

c 自然に対して人間の理性が能動的に立ち向かおうとする態度変換

d 自然認識に関する目的因(窮極因)にのっとった説明を探る態度変換

問十 本文の内容と合致しないものを次の中から二つ選べ。

- a ガリレイは、科学における感覚と経験および帰納の重要性をくり返し強調し、「近代人の姿勢」を生み出した。
- b ガリレイは、科学の対象を現象に限定することによって、自然にたいして能動的に立ち向かう姿勢を生み出した。
- c ガリレイは、数学的に導き出された法則から演繹を行うことにより、未知の現象に関する命題も証明した。
- d ガリレイは、現実の現象における様々な副次的要因を分別し捨象して一連の（思考実験）を行い、仮説を立てた。
- e ガリレイは、アリストテレスの「認識」概念を存在論上の問題まで含めて完全にくつがえすことに成功した。

二 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

小説の種類は分け方で色々になる。去ればこそ今日迄西洋人の作つた作物を西洋人が評する場合に、便宜に依りて沢山な名をつけてゐる。傾向小説、理想小説、浪漫派小説、写実派小説、自然派小説等と云ふのは皆在来の述作を材料として、其著しき特色を認めるに従つて之を分類した迄である。種類は是丈で尽きたとは云へぬ。一たび見地を変れば新しい名を発見するのは左迄困難でない。況や向後の作物が旧来の傾向を繰返して満足せぬ限り、時と場合と、作家の性癖と、発展の希望とによつて生面を開きつつ推移する限り、何派、何主義と云ふ思ひも寄らぬ名が続々出て来るのが当然である。

虚子の作物を一括して、是は何派に属するものだと、在来ありふれた範疇内に押し込めるのは余の好まぬ所である。是は必ずしも虚子の作物が多趣多様で到底概括し得ぬからと云ふ意味ではない。又は虚子が空前の大才で在来西洋人の用を足して来た分類語では、其作物に冠する資格がないと云ふ意味でもない。虚子の作物を読むにつけて、余は不図こんな考へが浮んだ。天下の小説を二種に區別して、其區別に關聯して虚子の作物に説き及ぼしたらどうだらう。

所謂二種の小説とは、余裕のある小説と、余裕のない小説である。たゞ是丈では殆んど要領を得ない。のみならず言句にまつはると褒貶の意を寓してあるかの様にも聞える。かたがた説明の要がある。

余裕のある小説と云ふのは、名の示す如く通らない小説である。「非常」と云ふ字を避けた小説である。不斷着の小説である。此間中流行つた言葉を拝借すると、ある人の所謂触れるとか触れぬとか云ふうちで、触れない小説である。無論触れるとか触れないとか云ふ字が曖昧であつて、しかも余は世間の人の用ひる通り好加減な意味で用ひて居るのだから、此字に対して明かな責任は持たない積である。只ある人々の唱へる意味に於て触れない小説と云つたら一番はや分りがするだらうと思つて、曖昧ながらわざわざ此字面を拝借したのである。と云ふものは、まづ字の定義は御互の間に默契があるとして、ある人々は触れなければ小説にならないと考へて居る。だから余はとくに触れない小説と云ふ一種の範疇を拵らへて、触れない小説も亦、触れた小説と同居存在の権利があるのみならず、同等の成功を収め得るものと主張するのである。

触れない小説の意味をもう少し説明しないと余の所存が貫徹しまいと思ふ。余は自己の考へを述べて、こんな風にも小説は解釈が出来るものだと言者から認めて貰へば好い。喧嘩を売る料簡でもなし、売られた喧嘩を買ふ気もない。従つて思ふ通りを思ふ通りに述べて誤解のない様に力めて置かなければならない。

個人の身の上でも、一國の歴史でも相互の關係(利害問題)にせよ、徳義問題にせよ、其他種々な問題)から死活の大事事件が起る事がある。すると渾身全国こんじんぜんこく悉く其事事件になり切つて仕舞ふ。普通の人間の様に行屎走尿の用は足して居るが、用を足して居るか、居らぬか気が付かぬ位に逆上さかさせて仕舞ふ。先達せんたつて友人が来てこんな話をした。小田原で暴風雨があつた時、村の漁船が二三杯沖へ出てゐても瀧を凌いで磯へ帰る事が出来ない。村中一人残らず渚へ出て焚火をして浮きつ沈みつする船を眺めてゐる許りである。此方から繩を持つて波を切つて、向ふの船へ投げ込んで、其繩を引いて陸へ上げるのが彼等の目的である。がさう思ふ様に目的は達せられんで、晩からかけて翌日の午後の三時頃迄は村中浜へ繰出の儘風の中雨の中に立ち尽してゐた。所が其長時間のうち誰一人として口を利いたものがない又誰一人として握飯一つ喰つたものがないとの事である。かうなると行屎走尿すら便じなくなる。余裕のない極端になる。大いに触れてくる。同時に眼前焦眉の事件以外何にも眼に這入らなくなる。世界が一本筋になる。平面になる。寝返りも出来ない様に窮屈になる。なつても構はないが、それ許りが小説になると云ふ議論がどうして出来る。世の中は広い。広い世の中に住み方も色々ある。其住み方の色々を随縁臨機に樂むのも余裕である。觀察するのも余裕である。味はふのも余裕である。此等の余裕を待つて始めて生ずる事件なり、事件に對する情緒なりは矢張依然として人生である。活潑々地の人生である。描く価値もあるし、読む価値もある。触れた小説と同じく小説になる。或人は浅いと云ふかも知れない。浅いと云ふ点に於ては余も同感である。然し価値がないと云ふ意味に於て浅いと云ふなら間違つてゐる。此場合に於ける深いか浅いか云ふのは色の濃いか薄いか云ふのと一般で、濃いから上等で薄いから下等と云ふ評価のつけられる訳のものでは勿論ない如く毫も作物を高下する索引にはならないのである。

護護を延ばして、今少し引つ張ると切れると云ふ所迄構はず持つて行く。悪いとは云はない。然し此処迄引つ張つてぴんとさせなくつちや駄目だよと云ふに至つては、緊張の趣は解して居るが雍容の味は解し得ない人だと云はれても仕方がない。の

びない護謨もゆとりがあつて、面白いと云ふ人を屈服させる訳には行かない。

茶を品し花に灌ぐのも余裕である。冗談を云ふのも余裕である。絵画彫刻に閑を遣るのも余裕である。釣も謡も芝居も避暑も湯治も余裕である。日露戦争の永続せざる限り、世間がボルクマンの様な人間で充滿しない限りは余裕だらけである。而して吾人も已を得ざる場合の外は此余裕を喜ぶものである。従つて此等の余裕より生ずる材料は皆小説となつて適當である。(喜ぶから小説になると云ふと小説は娯樂の爲と云ふ意味になる。此を詳しく説明しようとする小説の目的と云ふ議論になる。機会を見て余は此点に関する自己の意見を述べたいと思ふが、今は詳説する邊がないから別に云はぬ。只小説は娯樂を目的にしてはならぬと云ふ議論は成立せぬ。従つて娯樂も亦小説の目的として存在し得るものと許り一言して置く。)

以上は余裕ある小説の説明である。既に余裕ある小説を説明した以上は余裕なき小説も大概其意味が分つた筈である。が一言にして云ふとセツパ詰まつた小説を云ふのである。息の塞る様な小説を云ふのである。一毫も道草を食つたり、寄道をして油を売てはならぬ小説を云ふのである。呑気な分子、氣楽な要素のない小説を云ふのである。たとへばイブセンの脚本を小説に直した様なものを云ふのである。大いに触れたものを云ふのである。所謂イブセンの書いたもの杯は先づ吾人の一生の浮沈に関する様な非常な大問題をつらまへて来て其問題の解決がしてある。しかも其解決が普通の我々が解決する様な月並でなくつてへえと驚く様な解決をさせる事がある。人は之を称して第一義の道念に触れるとも、人生の根元に徹するとも評して居る。成程吾々凡人より高く一隻眼を具して居ないとあんな御手際は覺束ない。只此点文でも敬服の至りである。然し斯様に百尺竿頭に一步を進めた解決をさせたり、月並を離れた活動を演出させたり、篇中の性格を裏返しにして人間の腹の底にはこんな妙なものが潜んで居ると云ふ事を読者に示さうとするには、勢篇中の人物を度外れな境界に置かねばならない。余裕をなくなさなくつてはならない。セツパ詰らせなくつてはいけない。そこで大抵は死活問題が出てくる。一世の浮沈問題が持つがつて来る。(必ずとは云へない。人間は一寸風を引いたのが動機になつて内的生活に一革命を起さぬとは限らぬ。然し大体の傾向はと云ふと以上の如くである。)

(夏目漱石「虚子著『鵝頭』序」)

〔注〕虚子…高浜虚子（一八七四—一九五九）。俳人。小説家。

行尿走尿…便所へ行つて用を足すこと。日常生活のごくありふれたことのとたとえ。

随縁…条件に随つてものが生起し変化すること。

活潑々地…氣力に満ちて勢いよく活動すること。

雍容…落ち着いて和らいださま。

閑を遣る…ひまをつぶす。

ボルクマン…イブセン（一八二八—一九〇六）の戯曲『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』の主人公。

イブセン…イブセンと現在では表記する。ノルウエーの劇作家。

一隻眼…ものを見ぬく眼識。

問一 傍線部1について、次の問に答えよ。

(1) 「向後の作物が旧来の傾向を繰返して満足せぬ限り」とは、どういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a これから発表される小説が、すでに発表されている小説の種類の一つを否定するために書かれているときにはきまつて

b 今後書かれる小説が、これまで書かれた小説の種類のどれかと同じように書くことで充分だと思わないときにはかならず

c これから発表される小説が、すでに発表されている小説の種類のどれとも通底する要素を保持しているように書かせずればおそらく

d 今後書かれる小説が、これまで書かれた小説の種類の一つをその特色を生かして発展させて書けたと仮定すればやはり

(2) 「生面を開きつつ推移する」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 結晶度を高めながら展開してゆく

b 未来を開くために努力してゆく

c 本質を探り出す営為を続けてゆく

d 新しい方向を開拓しつつ進んでゆく

問二 傍線部2について、「言句にまつはると褒貶の意を寓してある」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを選び選べ。

- a 言葉に注目して受けとると、優れているか劣っているかを考えるようにと促している。
- b 言葉そのものの意味で言えば、要領を得ているかいないかということを直接指している。
- c 言葉に注目して受けとると、一方をほめ、他方をけなすことを暗に示している。
- d 言葉そのものの意味で言えば、一方が善で、他方が悪であることを比喩的に表わしている。

問三 傍線部3について、「渾身全国悉く其事件になり切つて仕舞ふ」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを選び選べ。

- a 事件を全身で受けとめ、全国の人々がその事件にとらわれて他のことを考えなくなることを示している。
- b 事件を自分のこととして受けとめ、全国の人々がその事件を重大視して同情すること。
- c 事件を歴史的なものとして受けとめ、全国の人々がその事件に過剰な注目、関心を示すこと。
- d 事件を死活の問題として受けとり、全国の人々がその事件を恐怖の対象にしたて上げること。

問四 傍線部4「大いに触れてくる」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを選び選べ。

- a 死活の重大事件に直面して、通常の判断に狂いが生じること。
- b 死活の重大事件に直面して、茫然自失の体になること。
- c 死活の重大事件に直面して、そればかりにとらわれること。
- d 死活の重大事件に直面して、感性が鋭く研ぎ澄まされること。

問五 傍線部5について、「それ許りが小説になると云ふ議論がどうして出来る」とは、どういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a それだけが小説というものになるという主張はできない。
- b それだけが余裕のある小説になるという保証はない。
- c それだけが眼前の描写に優れた小説になるとの説には疑問を呈する。
- d それだけが小説にとつての課題であるとの説はもつともである。

問六 傍線部6について、「のびない護謨もゆとりがあつて、面白い」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 触れた小説も、描写に臨場感があつて興味をそそられる。
- b 余裕のある小説も、落ち着いたやわらぎがあつて価値がある。
- c 触れない小説も、どこことなく深みがあつて楽しい。
- d 余裕のない小説も、緊張した趣きがあつて興奮する。

問七 傍線部7について、「百尺竿頭に一步を進めた解決をさせたり」とは、どういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 順々に理解を深めていった先に、大きな問題を解かせることによつて解決に至らせること。
- b スリリングに誘導して興味を引かせた上に、さらにどんでん返しになる解決に至らせること。
- c いろいろな角度から解釈したことを踏まえて、その中の一つの解釈を選ばせて解決に至らせること。
- d 十分に考察を尽くした上で、さらに人が思いつかないような新しい解釈に至りつくこと。

問八 傍線部 8 について、筆者がこのように述べるのは、筆者にどのような考えがあるからか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 人生の一大事と向き合うことだけが、人間に強いインパクトを与えるものではないという考え。
- b 人間は日常生活のささいな事でも傷つくものであり、人生の大問題ばかり見ていると足を掬すわれるという考え。
- c 人間の生活を変えてゆく力となるものは、人生の根元に触れている大問題と格闘することであるという考え。
- d 人生にとって大切なことは、死活問題というような大きな問題より先に、日常の小さな問題を解決することにあるという考え。

三

以下のA・Bを読んで、問に答えよ。

A さて、二〇〇〇年に『日本人の自画像』という本を書いたとき、私は、自分の学生時**に**ぶつか**った**問題が、吉本さんの戦争体験とも重なるかたちで、幕末の尊皇攘夷の志士たちの動きと深く通じていることに気づきました。

そこでは、志士と呼ばれる若者たちが、愚直に尊皇攘夷という考えに走り、外国人に対しテロなどをやったあげく、その属する藩ごと、薩英戦争、下関戦争といった手ひどいしっぺ返しを受けて、今度は、いつせいに尊皇開国に変わる、そしてこの二つのプロセスをセットとして、明治維新と呼ばれる革命を成就しています。この、若者たちがいったん「犬」になり、「犬」になつて歩いて「棒にあたる」構造が、自分の学生時の経験とも照らしあつて、とても興味深く感じられました。吉本さんから出された問いへの私からの反問により手がかりとなると思つたのです。それで、この事例をとりあげ、私はその本に、次のような意味のことを書きました。

考え方を形成する仕方をモデル化というと、次の二つがあるだろう。一つは、外からの情報が閉ざされているなか、「いまいる自分の場所から、自分の考え、価値観を作りだし、それに照らしものごとを考えてゆくあり方」であり、もう一つは、それとは逆に、外からの情報にふれたり、現実との関係を作りだすなかで、「自分の考えはさておき、他との関係から価値を割り出していく」あり方である。ここで先のほうを「内在」の思想——思想形成の仕方——、後のほうを「関係」の思想——思想形成の仕方——と呼んでみよう。すると、幕末期、欧米列強に開国を迫られ、そこから「無法な外国勢を打ち払え」とばかり熱くなつた尊皇攘夷派は、「内在」の思想を示している。自分たちは何も悪いことをしていない。それなのに欧米列強は砲艦で脅しつつ、国を開けよ、という。そういう列強のほとんどは、これまでさんざん非欧米のアジアの国々などを植民地にしてきた。彼らの強引な貿易強要によつてすでに不利な状況で金銀の流出などもはじまっている。なぜ、このような非礼、理不尽な要求に屈しなければならぬのか。そう彼らは考えたからである——。

このように受けとれば、「攘夷」というあり方が、幕末期、「これはおかしい、理不尽だ」にはじまり、「とにかくどんなこと

が起こつても、これだけはほんまに本当だと思ふ」こととして人を動かす、「いま自分のいる場所」から出発する考え方の所産だつたことがわかるでしょう。ここには、そういういわば植民地化されそうになっている国の弱者から見たばあいの、動かしがたい「正しさ」が、顔を見せているのです。

しかし、すぐに了解されるように、この起点の「正義感」は、その「正しさ」を実行すれば、よいのかといえ、それだけではすみません。なぜなら、彼らの一部が、暴走して生麦事件のようなテロ事件を起こす。すると、しつべ返しが起こり、たとえば商人(民間人)を殺害されたイギリスは報復として薩摩を攻め、薩英戦争となり、薩摩はこてんぱんに負けてしまう。まあ、気持でいうなら、一が百で返されるからです。その結果、薩摩の尊皇攘夷派は、「正しさ」は「正しさ」として自分の側にあることを確信しつつ、このままでは植民地になるほかないというので、いわば「次善の策」として、尊皇開国派に変わってしまう。変わるほかに生き延びる道はない、という現実の壁が、彼らの前にたちはだかるのです。

さて、ではどうするか。彼らは、尊皇攘夷から尊皇開国に転向する。変節します。しかし、そのとき彼らは、あの「関係」の意識にめざめていきます。

ここに「内在」から「関係」への転轍がある。私はそこに、こう書いて、このいったん「犬」になつての変節に、「内在」という自分のように無手勝流でもの¹ことを考える人間にとつての大きな契機が現れること、そしてその「間違い」の発見、その結果の「変節」に一つの可能性がある²と、考えたのでした。

B そもそも、尊皇攘夷論が生みだされたのは、水戸が最初です。水戸学の藤田幽谷が尊皇攘夷という言葉³を唱え、その弟子筋に当たる会沢正志斎が『新論』という未公刊の書物でこの考えを論理化するのです。しかし、あくまで彼らがいうのは、江戸幕府は、尊皇の立場を明確にし、攘夷を実行すべきだ、という体制内の変革の論です。これを、新しい天皇という權威のもとに草莽の士が結集して現体制を打破し、攘夷を実行して、新しい政府を作るべきという討幕の路線に脱皮させるのは、水戸まで七〇歳の会沢に長州から話を聞きに来る、このとき二二歳の吉田松陰なのです。

長州の松陰が一番に考えているのは、この国が欧米列強の植民地にならないことです。一方、会沢にあるのは、江戸幕府の行く末への関心で、朱子学的な身分制度の遵守が、第一の優先順位でした。松陰は、欧米列強を打破するには、江戸幕府の政体では無理で、この国の誰もが、身分にかかわらず、一致協力できるような体制が作られなければならない、と考えます。一君万民というのは、そこから出てくるアイディアで、この国が植民地にならないため、討幕が必要だとなる。そして全員で外国勢力を打ち払う、となります。他方、会沢には、江戸幕府の存続が重要なので、そのためには、開国もやむをえない、という判断に傾くと、自説を最後には軟化させ、藩内の尊皇攘夷激派(過激派)を尊皇攘夷鎮派(穩健派)として、抑えにかかるとす。

その結果、水戸は、攘夷を実行できず、逆に井伊大老暗殺の桜田門外の変の主役となり、藩内は分裂、自壊への道を歩みます。これに対し、長州、薩摩は、それぞれ、まずウルトラに走って攘夷を実行、藩の存亡に関わる列強、幕府との直接対決に直面し、「関係」の意識にめざめ、転向しつつ、これに伴い当然起こる藩内の危機を克服すると、一転、討幕で一致、そして新政府を樹立したときには、いつのまにか尊皇開国派になりおせているのです。

当時、一番ものの見えていた同時代人の一人といつてよい福沢諭吉は、薩長の尊皇攘夷論をさして、いま世間を騒がせている尊皇攘夷なる「妄説」は実際に天子を尊んでいではなく幕府攻撃の「姦計の口実」にすぎない、と喝破していますが(長州再征に関する建白書「一八六六年」、それは正しい。彼らにおける尊皇論は、吉田松陰に見られる独学のなかから編み出された手作り性(徒手空拳性)と、討幕のための口実といった都合主義を内在させた、いい加減さ、自在さ、つまりダイナミズムをもっていました。とても一〇〇年以上の前史をもつ朱子学の原理主義的蓄積のなかから抽出されてきた水戸の尊皇論のような権威ある厳密なものではなかったし、また、その攘夷論は、先に述べたように、「オレ達は何もしていないのに、列強は、軍事的に威嚇して開国を迫る、一方的なルールの貿易をもちかける。これはおかしい。このままでは他の国々のように植民地にされてしまう」という理不尽の感覚、弱者の抵抗という基盤に立つ、誰にも開かれた性格、普遍性を手にしていたのです。

(加藤典洋『どんなことが起こってもこれだけは本当だ、ということ 幕末・戦後・現在』)

〔注〕自分の学生時…筆者が全共闘運動を経験した大学生時代を指す。

吉本さん…吉本隆明。一九二四年～二〇一二年。詩

人、評論家。

藤田幽谷…かじたゆうこく一七七四年～一八二六年。江戸時代後期の儒者。

会沢正志斎…あいざわせいしさい一七八二年～一八六三

年。江戸時代末期の儒者。藤田幽谷の没後は、水戸藩の彰考館総裁ともなった。

問一 傍線部1の「この起点の「正義感」は、どのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 弱者の立場を知って、強者に対する動かすことのできない怒りを確信すること
- b 実際には暴発を伴うため声高に主張すべきではない、置かれた状況から見た異議申し立て
- c 過去の歴史から作られたモデルを出発点にした、耐えがたい状況を打破しなければならぬという確信
- d 貫徹できるか否かはとりあえず置いて、いま自分のいる場所から見ても理に合わない状況に異を唱えること

問二 波線部ア・イは、どのような意味か。次の中からもっとも適切なものをそれぞれ一つ選べ。

- ア
- a もっとも善いと言いつくろえる策
 - b 前もって準備していた本命の策
 - c 最善ではないがその次に考えられる策
 - d 本来なら手の内を見せたくない代わりの策
- イ
- a 無為無策で
 - b 無遠慮に
 - c 不器用に
 - d 自己流で

問三 傍線部2は、どのようなことを指すか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 自分のいる場所から発想した価値観から、他との関係から作りあげた価値観に、行動の方向性を切り替えること
- b 外から閉ざされた場所で生まれた思想から、海外に目を向け初めて知った思想に転向する機会を作り出すこと
- c 外からの情報の無いなかで育んだ思想と、他との関係から価値を割り出す思想の間に、折り合いをつけていくこと
- d 自分にとって代えがたい価値観が、他との関係から選択せざるをえない価値観により否定されること

問四 傍線部3において、筆者はなぜ「可能性」があると考えているのか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 尊皇攘夷論の立場から尊皇開国に転向するところに、他に生き延びるすべのない薩摩の一步先を見越した戦略が読み取れるから
- b 尊皇攘夷の運動を徹底することを通じて、かえってその限界を知ることができたからこそ、方針を転じた尊皇開国が可能となり、その後の歴史を動かしていく原動力になったと考えているから
- c 無手勝流で尊皇攘夷を乗り越えることに成功したため欧米の実力を知ることができ、その結果、尊皇開国の運動への転向が実現することになったから
- d 尊皇攘夷論の立場を本来取る必然性はなかったが、外国との戦争を通してその誤りを悟り、尊皇開国に立場を変えたことが、明治維新と呼ばれる革命を起こす契機となったから

問五 傍線部4における「ダイナミズム」とは何から生まれたものか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 政治を動かすための「妄説」であることを認めながら、手作りのご都合主義を内在させた自由さから生まれたもの
- b 攘夷を最終的に実現するためにまずは開国を主張する、いい加減だが柔軟な態度から生まれたもの
- c 精緻な理論に従うのではなく、矛盾を内包しつつも現実に応じていく奔放さから生まれたもの
- d 権威に頼れないため、やむなく武器を持たず、無謀にも立ち向かっていく計算の無さから生まれたもの

問六 傍線部5の「普遍性」とは、ここではどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 人々がよって立つ場所から発想した誰もが共感しうる性質
- b 外国から支配される理不尽さという誰もが理解できる性質
- c 原理主義的側面を否定し庶民にも受け入れられやすい性質
- d 列強に対する弱者の抵抗という人々の歓心を買うための性質

問七 二重傍線部Xは本文全体の趣旨に沿えばどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 外国の理不尽な要求と戦いはじめた若者が、幸運にも希望通りの解決策を見つけるに至る構造
- b 若者が「内在」の思想に従って行動するうちに、現実にも直面し、そこから進むべき方向を見出すことになる構造
- c 若者が情報をもって行動しようとしても、思いがけない災難が立ちはだかり、それが成就しなくなる構造
- d 十分な能力を持たない若者の行動が、「外在」の思想によりダイナミズムを獲得し、さらに急進的になる構造



